

日本製鉄と宝山鋼鉄

稲宮 健一

最近の日程に「日鉄に牙をむいた宝山」と題する記事があった。新中国が発足する折、故事の「飲水思源」である、水を飲むとき、井戸を掘った人への恩を忘れてないが生きていた。また、記事では周恩来と稲山嘉寛が小さなテーブルを挟んで対話している写真が載っている。1972年日中国交正常化を機に新日鉄は武漢製鉄所の近代化に協力した。この頃は新日鉄を先生と、自分達を生徒呼び、暫く蜜月時代が続いた。二一世紀に入ると、この状態が一変した。高度成長を達成した中国が鋼材を爆食し始め、新日鉄、宝鋼、アルセロールの合併が実績を順調に伸ばした。同時にかつての先生、生徒の関係は消え、独立したライバルの関係に変わっていった。そして二一年には日鉄は自動車に欠かせない特殊鋼材の特許侵害を提訴するに至った。

記事を書いた記者は宝山の親離れた現状に対して、最初に火をつけたのは我々ですよ、育った子供が親のこともっと意識すべきだという心情で書いている。その心持は分からないでもない。しかし、世界経済は生き物である。どんな優れた特許でもその有効期限は出願から二十年であり、しかも、普通登録されるまで、五、六年かかるので、権利に基づく活動ができるのは十五年ぐらいである。よって、譬え自分の発想した案件であっても、その分野を永続的に発展させようとするなら、常に革新を継続していかなければ生き残れない。

われわれも、高度成長期にはネタの多くは欧米であったが、独自の改良、改善を図り、「Japan as number one」の時代を体験した。当時賃金格差のあった中国、韓国の製造現場が日本の経済圏に加わってきた。製造現場が自分の職務地域から遠くに離れると、現場の生の声、即ち製造過程の製品に関することや、それにまつわる技術、技能者の雑多な事柄が経営陣に届かなくなる。そして、刺激の少なくなった国内に失われた三〇年をもたらした。若い人に世界の主戦場で野望を狙う活気が蘇ってきてもらいたい。